

北関東の山無し県 茨城のクライマー集団の会報

R&V 33号

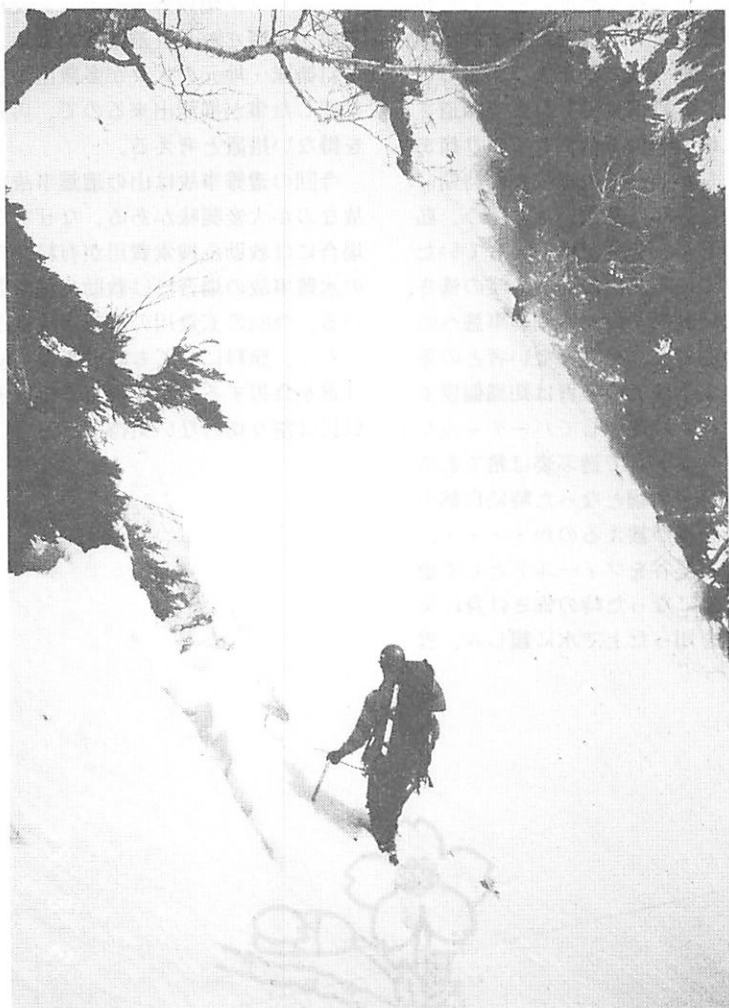
1999年4月~6月



ACC-J 茨城

目指せヒマラヤ!!

Rock and Valley 99' 春 No.33



赤沢岳西尾根を行く 《Photo by. MOTOZU》

雪、岩、沢に青春をかけた若人の記録集
アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャパン・茨城

玄倉川中州遭難事故に思う

今夏、丹沢玄倉川の中州でキャンプ中に増水によって18人が激流に流され、13人が尊い命を落とした事件は鮮烈な記憶として残っていると思います。誤解を恐れずに言わせて頂くと、これは天災ではなく人災である。雨中で中州にテントを張り、酒に酔って眠る事など自殺行為に等しい。山屋&沢屋にとっては絶対に考えられない行為である。まして、再三退避勧告を受けているにも拘わらず中州に残り激流に流されたが、素直に退避勧告に従い避難していればと悔やまれる事件であった。また、中州に取り残された人々が激しい流れに耐える姿が、流される直前までテレビで報道されていたが、その中には幼い子供も含まれており痛ましい遭難事故であった。しかし、この事故と同時期に山に登り、溪を遡っていた人々は多数いたと思う。私達の山岳会でも同時期に2パーティが溪に入っていたが、全員無事に帰ってきている。山の怖さ、溪の怖さ、水の怖さを知り、事前に周到な準備と不測の事態への対処方法を身に付けている者と、そうでない者との差が命の代償とは・・・いま学校での教育は知識偏重であり、子供達はテレビゲームに熱中してバーチャルリアリティの世界に遊び、アウトドアで遊ぶ姿は希である。この子供達が大人になり、子の親となった時に自然の怖さ、自然の中で遊ぶ術を誰が教えるのか・・・。

我々は大自然、特に山と溪谷をフィールドとして遊び、学ぶが、大自然が狂暴になった時の怖さは身に染みみついている。その怖さを知った上で水に親しみ、雪

と戯れ、壁を攀じり、そして大自然に溶け込む事が出来ると信じている。

玄倉川でキャンプ中に遭難した人々は、大自然の怖さをどこまで認識していたのだろうか、同一グループの中には再三の退避勧告を受けいれ、夜のうちに車に避難して難を逃れた人が数人いたらしが、大自然の中では謙虚になる事が必要と思う。今回のキャンプ事故で、キャンプ場以外でのテント設営の規制が強化される事が予測される。遭難者の救出、捜索に警察・消防・自衛隊・地元の人々が多数出動し、多額の捜索費用を要した事が推測出来るので、再発防止の為にはやむを得ない措置と考える。

今回の遭難事故は山の遭難事故なのか、川の水難事故なのか大変興味がある。なぜなら山での遭難事故の場合には救助&捜索費用が有料なのに対し、海・川での水難事故の場合には救助&捜索費用は無料と聞いている。今回の玄倉川の遭難事故はどちらなのか？

もし、無料にしても救助&捜索に要した莫大な費用は誰が負担するのか、税金で処理するにしても神奈川県民は割り切れない気持であろう。

(木村一 記)



《目次》

1999年 春号 4～6月 ACC-J 茨城

玄倉川中州遭難に思う	・・・ 1
集会報告	・・・ 3
山行報告	・・・ 4
越後駒ヶ岳スキー登山	・・・ 5
ドウドウセン偵察(その1)	・・・ 6
ドウドウセン偵察(その2)	・・・ 6
赤沢岳西尾根―猫の耳―	・・・ 8
岩木山・八甲田山・八幡平山スキー	・・・ 10
丹沢小川谷廊下	・・・ 12
御神楽岳湯沢右俣ダイヤモンドスラブ	・・・ 13
会津・叶津川赤崩	・・・ 14
小川山屋根岩2峰セレクション	・・・ 15
谷川岳・一ノ倉沢変形チムニー	・・・ 16
笛吹川東沢鶏冠谷左俣	・・・ 17
八ヶ岳・赤岳	・・・ 18
はじめちゃんの思い出日記《最終回》	・・・ 19
友好山岳団体の月報・会報・その他	・・・ 20
編集後記	・・・ 22

表紙…赤沢岳より針ノ木岳、ズバリ岳方面を望む (Photo by Motozu)

集会報告

(於、スカイラークガーデン)

-----【 4 月 】-----

4 月 4 日 =例会=

出席者 本図、木村、菊地、鯉河、笹平

4 月 27 日

出席者 本図、木村、古山、菊地、笹平

-----【 5 月 】-----

5 月 12 日

出席者 本図、木村、笹平

5 月 26 日

出席者 本図、木村、菊地、中島、鯉河

-----【 6 月 】-----

6 月 9 日

出席者 本図、菊地、笹平、鯉河、生井、古山、高木

6 月 23 日

出席者 本図、木村、菊地、笹平

山行報告

《 1999年 4月～6月 》

---【 4月 】

4月10日	越後駒ヶ岳	Ｌ木村、菊地、中島、古山
4月25日	赤谷川《その(1)》	Ｌ本図、高橋
4月29日	赤谷川《その(2)》	Ｌ本図、笹平、高橋

---【 5月 】

5月2日～5月5日	赤沢岳・西尾根	Ｌ本図、古山
5月1日～5月3日	岩木山・八甲田山	Ｌ木村、中島、菊地
5月9日	小川谷	Ｌ本図、他2名
5月23日	御神楽岳・湯沢右俣 《ダイヤモンドスラブ》	Ｌ本図、古山、笹平

---【 6月 】

6月 6日	小川山尾根岩	Ｌ本図、他1名
6月 6日	一ノ倉沢変形チムニー	Ｌ古山、笹平
6月13日	奥秩父トサカ沢	Ｌ本図、松原、他1名
6月27日	八ヶ岳赤岳	Ｌ本図、菊地、その他3名

越後駒ヶ岳スキー登山

1999. 4. 10

パーティ L 中島淳、菊地光夫、古山正文、木村一 (ACC-J 茨城)
名雪博二、松原丈夫 (ACC-J 東京)

3月の栗駒山は散々な山行でした。山行直前に腰を痛めてしまい、スキーで登行する度に腰に痛みが走り、栗駒山の山頂に着いたのは最後尾になってしまい、更に下降時にルート間違い、濃いガスの中1時間以上も山中を彷徨してしまいました。今回の越後駒ヶ岳はその雪辱戦として挑んだ山行であった。メンバーは茨城から中島、古山、菊地、木村の4名。東京からは名雪、松原の百名山コンビ2名の怪しげな中年登山隊総勢6名である。越後駒ヶ岳は越後の豪雪地帯にあり、厳冬期には我々のスキー技術では近づけない山である。登山のスタート地点、銀山平への道路奥只見シルバーラインは夜間通行止めになっており、しかたなくゲートの手前で仮眠を取り、翌朝、雪深い銀山平に着いた。道路の両側は5m以上の雪壁が連なり、その終点の石包橋の手前に車を止め、スキーにシールを装着して越後駒ヶ岳への第一歩をスタートした。北ノ又川左岸の平坦なコースをシールで進み、柳沢橋付近から道行山へ続く尾根に取り付いた。キックターンの連続で雪の斜面を登行するが、徐々に遅れ気味になってしまう。しかし、更に後方には中年の星菊地がいるので安心である。今回の山行は当初1泊2日の予定で入山したが、明日は天候悪化が明白なので日帰り登山に予定を変更した。速攻登山に徹する必要がある、遅れたメンバーは置いていかれてしまう。道行山にやっとなのおもいで到着すると先行したメンバーが待っていてくれたので一息つく事が出来た。ここからは小倉山へ続く山道を進むが、右側には雪庇が張り出している、左側の斜面をシールを効かせて登行する。小倉山の直下の急斜面を左にトラバースして小倉山から越後駒ヶ岳に続く稜線に飛び出した。ここから見上げる越後駒ヶ岳は威容があり、その頂上までは急斜面が控えておりまだまだ時間がかかりそうである。越後駒ヶ岳～中岳～荒沢岳と穏やかな稜線がスカイラインを描いているが、その稜線に雪煙が上がり上部は風が強そうである。百草ノ池手前で小休止し、上部の大斜面を目指してシールを効かせて登行するが、大斜面の途中でスキーアイゼンを装着して登行を続ける。風が強く地吹雪が舞い上がり、天候悪化が目前まで迫っているのが感じられる。中島&木村は大斜面の上部で登行を断念し、シールを剥がして百草ノ池を目指して滑降を開始。百草ノ池付近まで滑降してくると下から菊地が登ってきており、合流して上部を振り返ると名雪、古山、松原の3名が大斜面を滑降してくるのが確認出来た。合流後上

部の様子を聞くと、上部は風が強く所々クラストしており、スキーでの登行は無理と判断して登頂を断念して下降を開始したとの事。ここから全員で滑降開始、小倉山直下は登路より下の急斜面をトラバースして道行山へ続く稜線に出た。ここからは雪庇の反対側斜面を大斜滑降し、道行山への登りはスキーを脱ぎツボ足で登行。この頃から雨粒が落ちてきたので雨具を着用し、スキーを滑らすのが如何せん悪雪。ボーゲン&斜滑降、不格好の繰り返しで、快適とは程遠いスキー滑降になってしまった。この頃から中年の星、菊地の遅れが目立ち、下で待っているとコテン・コテンと転ぶ姿はまるでスキー初心者のものである。皆に合流してから彼の第一声が『もう山スキーは嫌だ』であった。

途中、道行山へ続く尾根から右側の沢筋へ降りようと試みるが、最初は野球のボール位の雪塊がだんだん大きくなり、自動車のタイヤ位の大きさになりながら落ちてくるので雪崩の危険を感じる。更に尾根沿いに下降しやっとなの思いで林道に出る事が出来た。長い林道をスキーを走らせて雨が激しくなってきた頃やっと銀山平に帰着。今回は登頂できなかったのも再挑戦を心に秘めて銀山平を後にした。

(木村 記)



ドウドウセン偵察（その1）

1999. 4. 25

パーティ L 本図一統、高橋弘（無所属）

谷川岳西面にある赤谷川は、スケールの大きな沢登りを楽しめる沢として関東では有名な沢である。とりわけ本谷は真越ノセンやドウドウセンなどの豪瀑を秘める谷として人気が高く、シーズン中はビバーク地を探すのも大変な程である。ここで読者の皆さんに質問ですが、皆さんは赤谷川本谷って面白いと思いますか？私個人の率直な感想を述べれば、赤谷川本谷って面白いとは思わない。どうしてこんなに人気があるのかもわからない。もっとはっきり言わせてもらえばつまらない谷だ。豪瀑はあるがすべて巻くのみで、ドウドウセンなんか見ることもできない。マワット下ノセンとマワットノセンは既にルートがあるので、ドウドウと真越が登れば面白いルートに変わると思う。

私も沢登りシーズン終盤といえる昨年の10月中旬、高木、生井と群馬の高橋氏を加えた4人で遡行してみた。なぜ高橋氏を誘ったかといえば、昨年頂いた便りの中に、高橋氏がドウドウセンに登りたいと書いてあったからである。私は以前から幻の大滝登攀計画の中にこのドウドウセンも入っていたが、高橋氏にこの計画を話した記憶はないので、同じ志しの人もいるもんだと誘ったのである。そこで不思議なことに気が付いた。それは、あるは

ずの枝沢が発見できなかったのである。国土地理院2万5千地形図上や、今までに発表されている遡行図にはっきりと書いてある枝沢が見つからなかったのだ。

今回の山行は地形図上の誤記の確認と直登の可能性を探るべく計画したものである（本当のことを言うと、この時は地形図の間違いについてはまだ自信がなかった）。さてルートはブナの木穴沢右岸尾根（仮称）を行き、1642m峰から双眼鏡で偵察するつもりだ。この時は、このルートをドウドウセンアタックのアプローチに使うつもりでいた。天気はあいにくの雨。適当な所から尾根に取り付くもヤブまたヤブで、ナタで枝を払いながら進む。雪の斜面を拾いながら行くが、やがて猛烈なヤブに行く手を阻まれてしまう。天気もミゾレになり、このまま前進しても今日中に行き着けないと判断し戻ることにした。なんの成果も得られないままトボトボと林道を戻った。家に帰ってからドウドウセンへの思いは募るばかりで、29日にもう一度行くことにした。高橋氏に電話すると彼も行くという返事が返ってきた。

（本図 記）

ドウドウセン偵察（その2）

1999. 4. 29

パーティ L 本図一統、笹平孝、高橋弘（無所属）

今日は笹平を加えた3人でやって来た。今回の目的はブナの木穴沢に登り1642m峰に立ち、そこから東北東に延びる尾根を下ってドウドウセンを正面から偵察し、さらに枝沢を本谷出合（ドウドウセン下）まで下降してみようとするものである。

天気は強い冬型のため雨。しかし、登るに従って雪となりやがて吹雪になった。天気予報では回復傾向だとの事。アイゼンをつけて一步一步ゆっくり登るも新雪が5センチに達してきた。“この勢いで積もると雪崩がヤバイ”頭の中でいつ敗退の決定を出すべきか考えながら歩いていた。でも時間が経つにつれて空も明るくなり、私の頭から敗退の2文字は消えた。天気予報に賭けてみようと思ったのである。1642m峰に着いたが吹雪は続いていた。私は自分の不運に諦めドッカと腰を下ろした。そしてまだ見ぬドウドウセンへの思いを話し合った。待つこと数十分。すると俄に吹雪が止み、青空まで見え出したのである。逸る気持ちを抑えて展望地点に向かう。

展望地点から北々東を眺めると、目に飛び込んできた本谷の風景は、雪解け水で増水し、ゴウゴウという轟音と水煙を上げながら数段になって落ちる大瀑布ではなく、予想とは裏腹に雪に覆われた平坦な地形だったのである。

私 『高橋さん、ドウドウセン埋まっちゃってますね』

高橋 『そうですね、残念ですね』

私… 『また無駄足だったか、ついてねえな』

高橋 『これじゃ偵察になりませんね』

私… 『でもちょっと変だと思わない？俺はあの兩岸の下にドウドウセンの大滝やゴルジュがあるとは、とても思えねーんだけどねあ』

高橋 『そう言えばそうですね、兩岸の傾斜が緩すぎますよね』

私… 『あそこの雪の切れている所に見えるのは河原みたいに見えない？』

高橋 『なんか私にも河原に見えるんですよ』

自分の目が信じられず木によじ登ったり双眼鏡まで使

って偵察した。それは正にドウドウセン上流の我々が去年の10月にビバークした地点だったのである。つまり国土地理院2万5千地形図にドウドウセンと記されている所には大きな滝なんぞはなかったのだ。

では我々がドウドウセンの巻ルートとして使っている日向窪とは一体どれなんだ、ということになった。高橋氏と私の意見が分かれ、それを確かめるべく、私は北方向つまりドウドウセンの真上に続く急峻な尾根を降りてみた。眼下には10月にドウドウセン上部から偵察したと同じ地形が展開していた。日向窪であるが、高橋氏の見解通り、我々が一般に巻ルートとしている日向窪とは扇沢のことであると私も確信した。それは高巻ルートがはっきりと確認できたからである。さらに1642m峰から北に少し下った地点からは、川崎柴笛クラブの撮った写真で見覚えのあるG滝が遠望できた。

さて2万5千図であるが、扇沢と日向窪が同じものだとすると、60mとも80mともいわれる裏越ノセンの位置は、等高線の間隔が広く緩い傾斜の沢底に記載されている所ということになる。我々が確認した等高線の数から計算しても、ドウドウセンの位置は既に2パーティが150mと確認していることからコンターが7本(70m)というのはちょっと変である。

我々の結論を言わせてもらえば、この辺の地形図は相当に間違っていると思わざるを得ない。では、これだけ多くの遡行者を迎える谷でありながら何故今まで分からなかったかということであるが、それは裏越ノセン、ドウドウセン共にその全容を見ることが容易にできないという特異性にあろう。案内書の作図者も地形図を信じ、または変だなと思って確認することさえままならぬ地形なのだ。さらに、遡行者は案内書を見ながら登って行く限り、何ら不審を感じずに登ってしまうのも一因であろう。

この山行でブナの本穴沢をアプローチとするドウドウセン登攀はできないことが分かった。それならそれで良いのだ。本谷を遡行して取り付けば良いだけだ。私は、ますますドウドウセン登攀に燃えたる闘志が沸いてくるのを感じていた。

帰りにいつもの食堂でタクティクスについて3人で語り合うが、高橋氏はなにがなんでも直登主義。それに対し私は、なるべく水線近くを行くが直登にはこだわらない。だから本番の登攀では私と高橋氏がパーティを組むことはないと思う。決して高橋氏の登り方に批判的ではないのだが、今の私にはそれだけのファイトがないと言って良い。お互い切磋琢磨してドウドウセン登攀成功に向けて頑張ろうではないか。



雪に埋まったドウドウセン

最後に“まだ見たこともないドウドウセンに一発勝負で、しかも単独で挑むのはあまり賛成できない。装備だって直登となると、一度見てみなければどのくらいの準備をしたらよいかも分からない。まず私達と一緒に登ってから直登の準備をしたほうが賢明じゃないのか。良かったら一緒に登ろう”と誘っておいたのだが……。

(本図 記)

P.S. やはり地図の誤記については、既に気がついていました。東北大学山岳部&東北大学山の会発行の会報13号(1988年発行)によると、山田氏は1987年に遡行しており、その記録の中で「ドウドウセンは、地図よりずっと下の位置」とはっきり指摘しておりました。

赤沢岳西尾根－猫の耳－

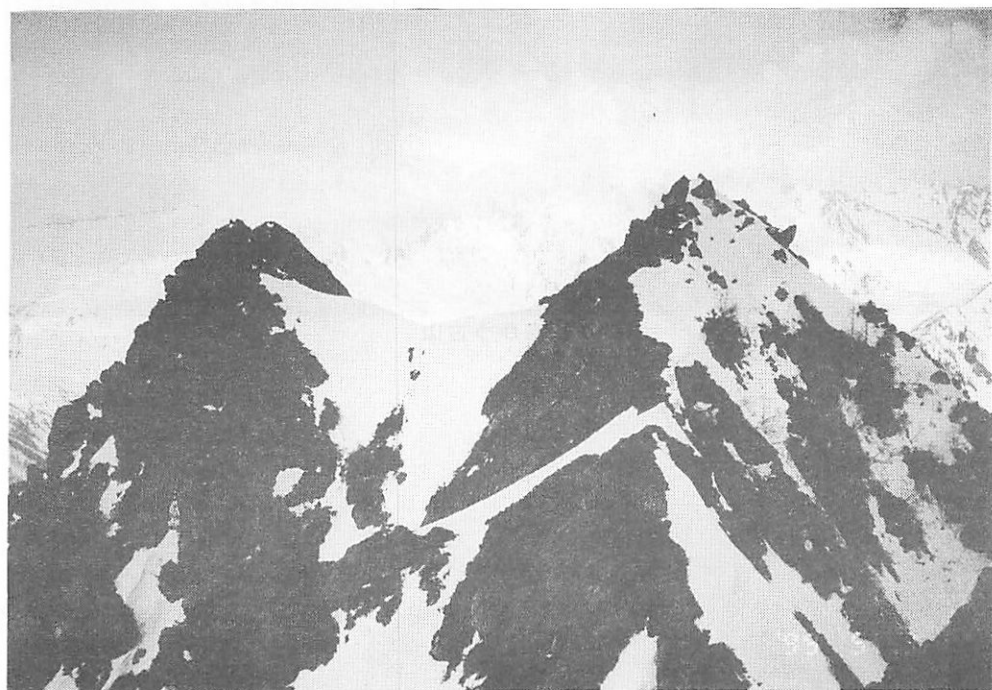
1999. 5. 2～4

パーティ 山本図一統、古山正文

5月2日。連休ということで扇沢駅の駐車場はいっぱいだった。扇沢からトローリーバスで黒部ダムに向かう。このトンネルの丁度真上の尾根を登ることになる。黒部ダムの登山出口から雪の積もった車道をしばらく進んで、尾根の末端と思われるところから取り付いた。はじめの急な雪壁は直登せずジグザグに登り、踏み跡の残る樹林の中に入った。登るに従って尾根がはっきりしてきた。樹林の切れ目からは黒部湖の向こう側のロープウェイの大観望がよく見えるし、案内の声さえ聞こえてくる。尾根がやせてくると第Ⅲ峰西峰のドーム状の岩壁が間近になった。岩壁の下のコルから右に大きく回りこむ。これはルンゼをトラバースする形になり、右下は遥か下まで続く滑り台のようだった。一つ目のルンゼをトラバースし、樹林を突っ切り、二つ目のルンゼをトラバースして急な斜面の樹林帯を登ったところでビバークすることにした。第Ⅲ峰東峰のすぐ下あたりであった。この第Ⅲ峰の東峰と西峰がいわゆる“猫の耳”であり、丁度”猫の額”“あたりがビバーク地だった。かなり急な斜面でのビバークだったので、階段を切ったりして、安全になるようにした。

3日。東峰からの下りで1ピッチ懸垂した。次々に現れる雪壁、雪稜、岩稜を登り（岩稜で一箇所ロープを出

した）、赤沢岳頂上に着いた。東は扇沢、西には黒部湖が眼下に望まれた。ここからはスバリ岳、針ノ木岳を超えて針ノ木峠へ向かった。とにかく峠の小屋でビールを飲みたかったから、一生懸命に歩いた。途中針ノ木岳の方からきた登山者に小屋は営業しているかどうか尋ねたら、やってないとのことで、二人ともがっかり。途端に、足取りが重くなった。針ノ木雪渓は春スキーをする人たちが登ったり、滑ったりしていた。針ノ木岳の最後の登りのとなる前のマヤクボのコルでスキーヤーが携帯電話をかけていた。針ノ木岳に着いて後続のパーティの様子をぼんやりと眺めていたら、一人がマヤクボのコルの少し手前で黒部湖側に滑落して、見えなくなった。一人がスキーヤーの携帯電話を借りて、電話しようとしているようだが、つながらないようでどんどん針ノ木岳の方に登ってくる。コルで通じていたのだから、おかしいなと思った。とうとう山頂に着いたがつながらない。アンテナを伸ばすことを教えてあげたらすぐに通じた。その人は単独行の人で、遭難パーティに依頼されたらしかった。我々も手伝いに下ろうとしたが、警察の救助ヘリがすぐに出るとのことなので、差し控えた。針ノ木峠に着いてビールもなく、また天気が悪くなるのは判っていたので一気に車まで下ることも考えたが、車の中で寝るのもつ



3峰 “猫の耳とはこれだ！”

まらない。山を楽しむと言うことで、ビバークすることにした。針ノ木峠の小屋の脇でツェルトを張ってビバークの準備をしていたら、ヘリが飛んできて救助活動をしているようだった。張り綱は大きな石にしっかりと結んだ。

4日。雨とガスの中針ノ木雪渓をひたすら下る。途中からは雪が腐ってズボズボと埋まって歩きにくかった。途中の小屋は営業していた。昨日頑張って、ここまで下ってくればビールが飲めたのにと悔しがった。天気が悪いせいか車の少なくなった駐車場には、午前中に着いた。
(遭難者は結局亡くなられたそうだ。ご冥福をお祈りします。)

5月2日

黒四ダム(8:22)ー猫の耳下(15:40)

5月3日

猫の耳下(5:33)ー猫の耳西峰上(5:54)ー

赤沢岳頂上(9 :11~9:25)ー針ノ木岳(12:49~13:50)ー針ノ木小屋(14:21)

5月4日

針ノ木小屋(6:12)ー扇沢(7:44)

(古山 記)



2 峰に向かう古山



赤沢岳頂上にて

岩木山・八甲田・八幡平・山スキー

1999. 5. 1～5. 3

パーティ L 木村一、中島淳、菊地光夫（ACC-J 茨城）

松原丈夫、吉田信一（ACC-J 東京）

津軽平野にも遅い春がやっとやってきて桜の開花である。関東平野よりは、約一ヶ月のおくれで、2回目の花見である。集合は現地集合で東京パーティ、茨城パーティ2台で合流となる。茨城からの3人は、早く現着と思い、早出してノンストップで現着となるが、それでも早朝3時ごろであった。とにかく遠い。東京からの2人は、深夜12時まで仕事をしてからの出発なので少し遅れるとの携帯電話が入ったが、高速隊の2人組みなので、交代しながらの運転で、早朝6時30分現着となり、これでメンバー5人がそろそろ。

今日は岩木山山スキーなので山頂からスキーで下った所にバス停はあるのだが何せ本数が無く不便なので、前もって本図氏に話を通しておき、弘前に通っている大学生（御子息）に無理を言って1日付き合ってもらった。

彼には岩木山中腹の駐車場まで送ってもらい我々が滑り下る所に待っていてもらうという、非常にスキーヤーにとって有難い役割をしてもらう。

1本目弥生コースとなる岩木山スカイラインを一番目のゲートイン。まだ料金所の人がいなくロープはあいていたが、何せ善人ばかりの集まりなので料金所わきに合った事務所に声をかけ、料金を支払い、中腹の駐車場に現着。下の方では感じなかったが山の中腹から上はかなり

の強風が吹き、乗っていくはずのリフトが運転を見合わせとの張り紙があり、待っていても仕方が無いので、リフトの下をザックにスキー板を固定して歩き始める。少々足場も悪く強風の中の登山で予定外のアルバイトであった。約40分の登りでリフトの終点の小屋に着き休憩を取る。これより岩木山の頂上を目指して登り始める。登りは岩がゴロゴロはしているが、これといって悪場も無く適当に雪が岩を埋めてくれているので、約1時間で山頂である。山頂には岩木山神社があり記念写真を撮り朝飯を食べのんびりとしたひとときであった。天気は風が強いが快晴の空で気分がいい。山頂から滑りはやや東側の急斜面であるが、準備すると気持ちの切り替えが出来、最初の滑り出しの所では、はい松帯があって左に右にと回り込み、すると目の前はすごいスケールの大きい大斜面である。滑りごたえは十分である。斜面も手ごろで沢筋へと滑るので、コースも分かりやすく非常に面白い。十分満足のいく滑りが出来る。雪質もよく滑るが春スキーなのでひざや足に負担がかかり息が切れる。今年の東北地方は雪が多く、ず〜っと下までスキーで滑る事が出来た。以前はスキー板を取り、ずいぶん歩いたと中島氏が言っていた。彼は昔ACC-Jの仲間と以前のもこの弥生コースを滑っていた。今回はとことんスキーも



八甲田山頂上にて…松原、木村、吉田、中島

板をつけて下り車の入ってくる林道の手前まで滑れた。そこには今回、(無理?)頼んでおいた本図ジュニアが待っていてくれたので時間の無駄が無く効率よくスキーが出来た。車の中で次は長平コースにするか獄コースにするか迷ったが、リフトが強風で運転見合わせ中なので仕方なく獄コースにした。獄コースは岩木山スカイラインのすぐ隣のコースなので難は無く、上部の方は楽しめるが、下部の方はコースも細く樹林帯の滑りとなる為、ただ流して滑る。終点がバスのターミナルの所なのでビールで乾杯をする。時間は昼の3時近かったので今日中には、次の目的地の八甲田山なので本図ジュニアにはまたの再会を約束して岩木山を後にする。途中、今夜の酒と食料をスーパーで買い求め、酸ヶ湯の駐車場に TENT を張る。その後全国共通の温泉券で入浴させてもらい入浴後は、TENT の中で岩木山で採ってきたフキノトウ、タラの芽、コシアブラの天ぷらでビールをガバガバ飲み、翌日の分まで飲んでしまう。

翌日は一番で行き、まずは松原氏のワゴン車を谷地温泉近くの駐車場に1台をデポしておき、一番のロープウェイを乗り今日のコースである大岳経由帯場岱コースである。天気は今日もよく快晴、昨日滑った岩木山がよく見えた。昨日ほどではないが風は強かった。

最初は前方に見える小高い丘を目指して滑るのだが、左側の方に数人のパーティがおり又ボールも見え、近づいてみるとボールに宮様コース いくついくつと記入されており、又小高い丘の方向へず〜っと戻る。小さなアップダウンを繰り返して、大岳の鞍部をめざし1

時30分、大岳の直下にある小屋に着く。そこで休憩にした。、ここより先は急な大岳への登りとなる。スキー板をザックに固定しての登りである。山頂には酸ヶ湯側から登って来た人達が何人かおり、頂上には10人前後の人で賑わっていた。これより山頂からの滑りであるが、東面のため岩ずたいに少し足場の悪い箇所は回りこみながら雪面に下る。滑り出しは、少し急だがいつもトップの中島氏が急下降でスピードをつけて一気にシュプールを描く。2番目は木村氏。3番目が菊地と間隔をあけて滑っていく。途中傾斜のゆるくなったところで一息すると今滑って来たところを顧みるとものすごく大きなスケールのある大斜面の上に自分達の滑って来た所がはっきりと残っていて気持ちの良いものである。上部には少し遅れた松原、吉田組が豆粒の様に見える。大岳からの一気のこの斜面は素晴らしく良いコースである。広さでは八甲田の方が上だが、斜面がある岩木山は滑っては面白いと今回は思った。私は以前に両方とも滑っていたが以前はスケールの大きい八甲田の方が好きだった。今年は雪が多くバスターミナルの前までスキーで行く事が出来、ぜんぜん歩かず楽である。デポしておいたワゴン車でロープウェイ乗り場まで戻り、2回目は銅像コースに決める。又2台の車でスキーの降りてくるところに車を1台置きに行き、残った人達はロープウェイの順番待ちを行い効率よくロープウェイに乗ることが出来た。

銅像コースは、さほど長くは無く低い樹林帯を抜けていくコースが特色であり、広々とした大斜面とかスピード感にはかける。駐車場に戻り、今日中には次の

目的地である八幡平への移動だが、遠い為高速道路を使い移動となる。途中、夕べ飲んでしまった酒をスーパーで買い求める。

今日のテント場は、藤七温泉の管理地である駐車場が温泉から少し離れていたが、誰もいないので自由にテントを張ることが出来た。その後5人で藤七の名湯に入浴して、青森の市場で買ってきたハタハタを鍋にして最後の晩餐会を開き5人の手拍子で飲めや歌えて全員疲れるまで宴会をやった。そうこうするうち一人が疲れて横になったのをきっかけに残りの人達も何時の間にか寝てしまっていた。

早朝は、蒸ノ湯に1台の車をデポしておき、八幡平へと向かう。八幡平での山スキーは全員始めてであり、最初はルートを間違えて源太森のピークまで行ってし

まいとんだ勘違いをしてしまった。その後コースを又逆戻りして八幡平の山頂を目指してブナ森から蒸ノ湯コースを滑る。このコースは樹林帯が多く、流すだけのコースなので面白みにかける。標高が高い為か？、八甲田・岩木山よりも雪の量は多いと思われる。ここ八幡平でのベストコースはアスピーテラインの上の道路より下の道路へと、コースの長さは無いが傾斜があり2台の車があればベストとおもわれる。

その後、もう一度藤七の湯につかり、東京の2人組みと又の再会を約束して、今回の山スキー山行を終えた。

(菊地 記)

丹沢小川谷廊下

1999. 5. 9

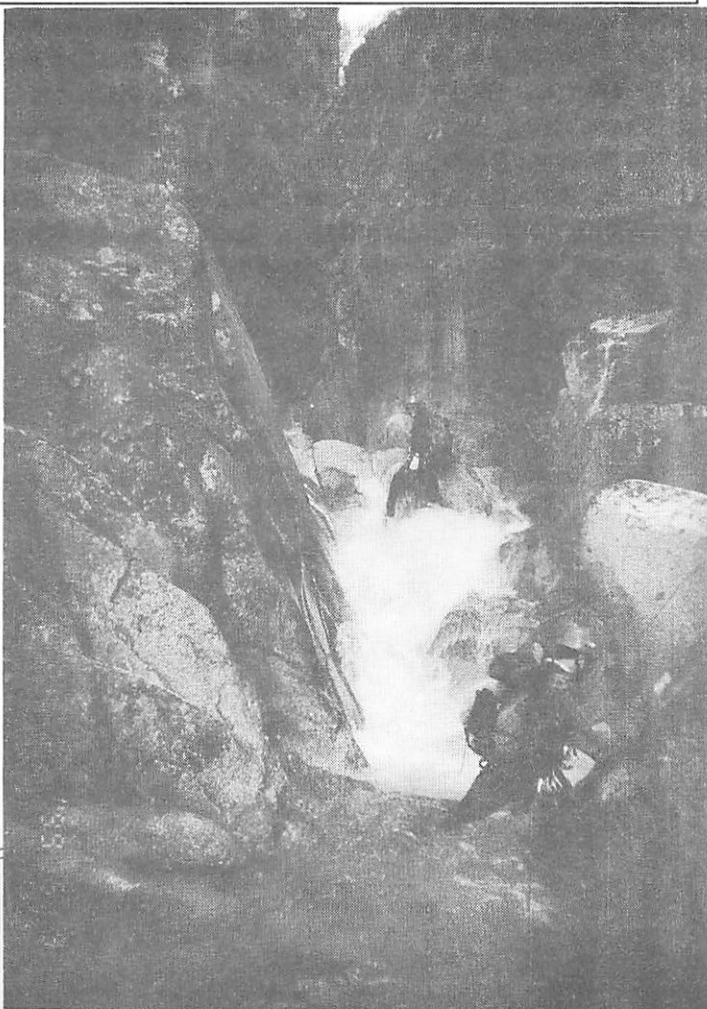
パーティ L 本図一統、大月繁夫（笠間おちこち山の会）、関口幹（同前）

笠間おちこち山の会の会長である大月氏から“うちの会でも沢登りを始めたいと思うので、ぜひ一度連れて行ってもらいたい”と頼まれ、この山行が生まれた。もっとも関口氏とは7月に西表に行く計画もあり、関口氏のトレーニングも兼ねていた。沢登りとはどういうものかという机上講習は数週間前に済ませた。大月氏は茨城県勤労者山岳連盟の理事長でもある偉いお方である。（私にはどうしても良いことではあるが……）

早朝、神奈川県々民の森だっけか？の前の駐車スペースを出発、小川谷に降りる。大月氏は新品の溪流シューズを履いている。今回のために新調したのだから当然といえば当然である。すぐにCS滝にでた。左に取り付くも水压に押し戻されそう。しかし、ここは踏ん張って登り切る。お助け紐で2人を上げるが、ここで全員ずぶ濡れになる。後で話していたが、お二人はこの先どうなるのか不安になったそう。

私は小川谷は3回目かな？。初めて来たときは登山靴で、なるべく水に入らないよう登った記憶がある。何故ならば岩登りのトレーニングとして来ていたからだ。以前我々の意識の中では、沢登りとは岩登りのトレーニングの場であった。なんとという間違った考え方をしていたのだろう。2回目はワラジを履いて水の中に積極的に入った。もう楽しいのなんのって沢登りを十分満喫できた。

でも今回は水の中に入るには時期がちょっと



小川谷を行く関口氏（上）と大月氏（下）

早く、とても泳ぐ気持ちにはなれない。股下あたりまで浸かりながら順調に登っていく。例のツルツルの大岩は、以前ボルトまではフリクションで登った記憶があるのだが今日はまったく登れない。これもワラジと溪流シューズの違いのためか？立て掛けてあった流木をスタンスにシュリングを掴む。石棚の2ピッチは、ザイルを使って大月氏と関口氏にリードしてもらう。両氏はだいぶ馴れてきて“沢登りは非常に楽しい”を連発していた。内緒だが私はここで恐竜の卵を拾った。直径11センチあり、今は私の宝として拾得年月日を記入し、部屋に飾ってある。この恐竜の名前はオッシー（小川谷に居たから）という。もし見たい人がいたら本図までご連絡下さい。（拝観料1万円でけっこうです）

やがて終了点の河原に出てソーメンを作って食べたが、ご両人はこれまた非常に気に入ったようで、用意した量はアッと言う間になくなってしまった。（後日知ったことだが、大月氏は大いに気に入ってしまい、沢に行くときは必ずソーメンを持っていくそうである）

天気にも恵まれとても楽しい遡行だった。笠間おちこち山の会に、沢登りが定着するのもそう遠いことではあるまい。そうそう大月氏は茨城県勤労者山岳連盟の理事長だっけ。茨城登山に定着するのも遠くはないのかな？

車(7:38)ー遡行終了点(10:57~11:57)ー車(12:37)

(本図 記)

御神楽岳湯沢右俣ダイヤモンドスラブ

1999. 5. 23

パーティ L本図一統、笹平孝、古山正文

磐越高速が開通したので御神楽岳へは昔と比べると時間を掛けずに到着できるので、登山口で少しは睡眠をとることができる。朝に弱い私は、いつものことだが、朝起きるのがつらい。眠い目を擦りながら、いつもの登山道に行く。御神楽岳の登山道と分かれるスモヒラには、大きな鍋が放置されていた。昔、ここはぜんまいやわらびなどの山菜採りの場所だったのだろう。ここから沢どうしに進み、しばらく行くと雪溪に乗り移り、雪溪上を

大滝下まで登った。ここで準備をしていると、笹平君の『あ！！』と言う声が聞こえた。何ごとかと聞けば、クライミングシューズを忘れたのだという。正確に言うと、シューズは2個持ってきているのだが、それが2個とも同じ右足用だった。登山靴で登ってもらうことにした。大滝右の中央稜をトラバースするようにして2ピッチロープを出して大滝を超えた。その後、開けた明るいスラブを快適に登った。問題は最後の稜線へのつめの3ピッ



右俣ダイヤモンドスラブに行く

チだった。1ピッチ目、気休めのフレンズ1個と灌木のランナーだけで岩場を登る。2ピッチ目は急傾斜の樹林帯の木登り。3ピッチ目も、気休めのフレンズランナー1の岩登りから、樹林帯の木登り。傾斜が緩んだ尾根を少しばかり藪こぎで登ると、柴太郎新道の登山道に出た。後は、ねまがり竹を採る。笹平君を手伝ってのんびりと下った。帰路の途中で温泉で汗を流すつもりだったが、笹平君が「具合が悪い」と言い出し

たのでやめにした。時間が早かったので、郡山まで一般国道を使い、儉約に努めた。

車(4:59)ースモ平(5:46~5:54)ー大滝取付(6:49)ーダイヤモンドスラブ取付(7:11)ー奥壁取付(9:18)ー稜線(12:01~12:21)ースモ平(15:06)

(古山 記)

会津・叶津川赤崩

1999. 5. 29~30

パーティ 本図一統、ほか多数

去る2月15日、浦和浪漫山岳会の池田知沙子さんが急逝された。生前は随分とお世話になった方である。この山行は浪漫のOB山菜山行であるが、今回は池田さんを偲ぶ追悼山行といっても良い。池田さんのご主人をはじめ、盛岡、仙台、大阪など遠方より多くの方々が参加された。

29日。二つの班に別れて赤崩を目指す。私は安全な真奈川~赤崩峠ルート組に入った。赤崩は2回目である。今年は雪が多いと聞くが、前回が目茶苦茶多かったの、そうかなあ・・という感じだ。赤崩にはまだ山菜が無いというので途中採りながら進む。最後の急登を過ぎると赤崩峠だ。心地よい風が頬をなでる。ブナの木に熊の爪による引っ掻き傷があった。ここから赤崩まではブッシュから小沢を降りると一投足であった。前回は雪が1mもあったのに今日は無い。でも例年よりは多いんだそうである。

一連の準備が整い、夕方からセレモニーが始まる。

◎オタイ安置

◎メタイ入場

◎オタイ・メタイ合体 依り代となる

という儀式が行われた。女性と男性の姿をした木の枝を合体させるのであるが、私は初めての経験で、この儀式の意味が良くわからなかった。

◎献花

◎浪漫代表挨拶

◎献杯

◎参加者自己紹介

◎献歌

と進み、後は池田さんの思い出話と山の話に花が咲いた。そうなんだよ、池田さんは、我々が山に登り山の話をしていれば喜んでくれているにちがいないのだ。でも池田さん、ちょっと早過ぎたんじゃないかい。あまりにも急過ぎたんじゃないかい。私は今の高桑さんの顔を見るのが辛いです。盛大な焚火を囲んで夜遅くまで宴は続いた。

30日。起きぬけに竿を持って出掛けてみた。でも残念ながらアタリはまったくなかった。11時に祭り木の前に集合し、散骨を行う。

帰りも赤崩峠経由で山菜を採りながら帰る。(後日談であるが、根がかりクラブの山田さんに教わったコシアブラの料理方法は抜群の旨さで、私はそっこん気に入ってしまった。今まではコシアブラを多量に欲しいと思ったことはなかったが、今度は多量に採るぞ)

これで池田さんの追悼山行は終わった。池田さん安らかに・・・・合掌。

(本図 記)



小川山屋根岩2峰セレクション

1999. 6. 6

パーティ L 本図一統、関口幹（笠間おちこち山の会）

今日は7月に行く西表のトレーニング山行である。西表で登攀をするつもりはないのだけれども、イザという時のためにやっておくことにした。

小川山の廻り目平キャンプ場の雰囲気は何とも長閑かに感じる。やはりアルパインクライミングとはどこか違う。そろそろこんな山行（山行とはいえないかな？）も良くなってきたと感ずるのも歳のせいかな。若い頃は、困難を求めてとか厳しさを求めてとか、勇ましいことを並べ立てて山に向かったが、今はそんな考えは全くない。楽しくなければ趣味ではない、というのが今の私の考え方である。だから私は岩登り沢登りだけではなく、ハイキングもキノコ採りも山菜採りも岩魚釣りも山スキーもやる。すべて楽しいからだ。それと、趣味である以上、家族を路頭に迷わせるようなこともしたくない。でも実際は仕事をだいたひ犠牲にしてきたことは事実であり、山行のために収入を減らしていることも現実ではある。しかし自分で納得できる範囲内なので、もし家族の生活が成り立たなくなるほど生活が苦しくなったら山行はやめるつもりでいる。（はたして本当にやめられるかどうかどうか疑問は残るが）

さて、どこを登ろうか。難しいルートは登れないし、西表のトレーニングとすれば、やはりマルチピッチのル

ートであろう。小川山では初心者向きの人気ルート、セレクションに行くことにした。取付まで行くと中年ばかりの7～8人のパーティがいた。こりゃだいたい待たされるなどそこに座り込む。案の定トップはそれなりに行くが、後が続かない。だいたひモタモタしていたが、テンションすることなく皆登っていった。やっと我々の番がきた。1ピッチ目、右斜上。2ピッチ目、5.8のスラブを直上する。要所要所に支点があるので安心だが、スリッップすると最大で10メートルはすっ飛ばす。すっ飛ばすだけなら良いが、あちこち擦り傷を作ることは間違いなからう。打ち所悪けりゃ命も落とすかも知れない。昔みたいに登山靴ならとてもルートにはならない所だ。関口氏はフォローなのだが岩登りに不慣れなため、極度の緊張によりテラスに着いたら気分が悪くなり吐き気をもよおす。が、すぐに元気を取り戻す。3ピッチ目、チムニーは楽勝。その上のテラスでまた時間待ちのため私はお昼寝状態となる。

関口氏『あれ、・・・さんじゃないの』

先行パーティ『あれ、関口さん、こんにちは』

どうやら今年のGWに鹿島槍ヶ岳の東尾根と一緒にいった人達らしい。なんてこの業界は狭いんだろうか。“モタモタしてないで早ようせんかい”などと言わなくて



セレクション2ピッチ目を登る関口氏

良かった。でもお互い3ピッチも登るまで気が付かないなんて？だ。次のピッチも5, 8で2歩が難しい。先行の尻を追いかけて5ピッチを登ったら終了してしまった。

私『ありゃ、後2ピッチあるんじゃないかって』
先行パーティ『私達はエスケープしたんです。正規ルートはその下を懸垂してトラバースですよ』

私『あっそうか、いまさら降りるもの面倒だな』

関口氏を上げて相談の結果、最後の2ピッチは割愛することに決定。彼らの雑談を聞きながら登攀用具を整理する。彼らは山の話でも道具の話でも非常に熱心で詳しく、今の若い奴らに聞かせてやりたい内容だった。小川山に不案内な私は、彼らにルートを少し教え

てもらった。その中で面白そうに見えた小川山ストーリーというルートは次回に必ずトライしてみたいとなった。

その後場所を水晶スラブに移して練習したが、10aのスラブになると殆ど登れない。もっと柔らかいシューズを履くと何とかなりそうだが、悔しいかな登れないのだ。ここで、あ〜だこ〜だとトレーニングをして下山する。

帰りは中津川林道が事故のため不通となり、遠回りをして帰路につく。

(本図 記)

谷川岳・変形チムニー

1999. 6. 6

パーティ L古山正文, 笹平孝

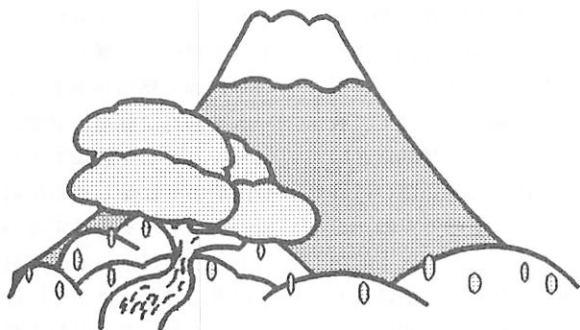
今年の一ノ倉沢は、四ルンゼ上部の崩落で、雪溪の上に碎石が覆っていて、一面灰色になっていた。登りはスリップする心配も無くテールリッジまで行く事が出来た。テールリッジ上部の所では、けがをした人を降ろしている最中だったので、ひどく混雑していた。南稜テラスでは何パーティかすでに順番待ちをしていたが、変形チムニーの取り付きには誰もいないのでほっとした。

1ピッチ目は、調子に乗って登りすぎてしまい支点が見つからなかったの、仕方なくハーケンを一本打ち足してビレーすることになった。変形チムニーの所は、足が滑りそうで想像以上に難しくて怖かった。ここから右にトラバースして中央カンテと合流する。ちょうどガイドの人達が登ってきていたので、大分賑やかになった。このルートに2パーティが同時に登っているの、ロープだらけになってしまったが、何とか先に行く事ができた。

次のピッチの順番待ちをしていると、追いついてきたガイドの人が掴んだ岩が剥がれて落ちそうになった所を古山さんに助けられていた。目の前で頭ぐらいの岩が2〜3個下へ落ちていった時なんかは声も出ないぐらいびっくりして寒気がする程だった。この先核心ピッチで、アブミを出す所がある。四畳半テラスまで来ると後は、順調に進む事が出来た。烏帽子岩基部を回りこんだ所でロープを仕舞い、5ルンゼの頭で1ピッチロープを出した。4ルンゼ上部には崩壊した所は無くなっている。国境稜線に出た所が一ノ倉岳頂上で、ここで昼食にした。

下りは、堅炭尾根を降りた。

(笹平 記)



笛吹川東沢鶏冠谷左俣

1999. 6. 13

パーティ L 本図一統、関口幹（笠間おちこち山の会）、松原丈夫（ACCJ東京）

今日が最後の西表トレーニング山行である。
前は菊地の靴が壊れ敗退したルートだ。西沢
への道と別れ東沢に入ると前方より見たことの
ある顔が。

その顔の人『おはようございます』

私……『あーれー、東海林さんじゃないの、
おはようございます』

その顔の人『今日はどちらへ』

私……『鶏冠の左俣です。東海林さんは』

その顔の人『夕べは新人歓迎でビバークして一
杯やりました。今日は新人を連れ
てヌク沢です』

私……『そうですか、それはそれは良いこ
と、では気をつけてね』

その顔の人『本図さんも気をつけて』

すずらん山の会の会長、東海林さんであった。

魚止ノ滝は迷わず左岸をまく。前回もそうだっ
たが、直登しても悪くはあるまいがなんか面倒
なのだ。逆「く」の字の滝はノーザイルで直登、
最後は残置シュリングを掴んで乗越す。ザイル
を束ねている先行パーティに追いつく。私の顔
を見てニコニコしながら挨拶。私も儀礼的挨拶。
先行パーティのリーダーらしき人

『どこかでお会いしましたよね』

私『えーと、そーでしたっけ？』

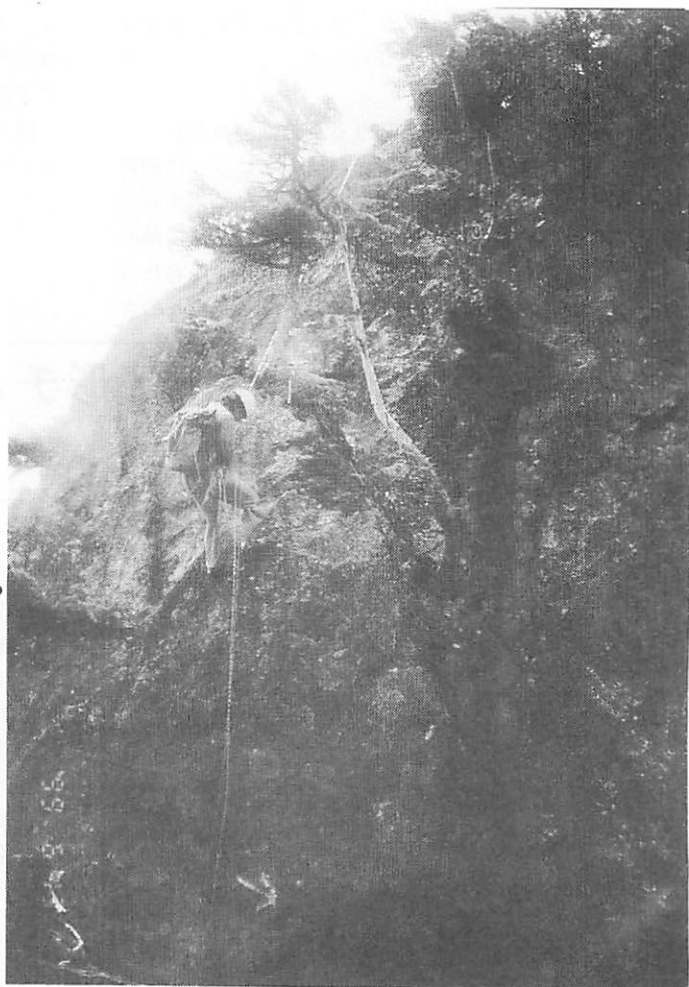
先行『たしか去年、檜枝岐の硫黄沢で』

私『俺、去年硫黄沢なんか行ったっけかな』

先行『キノコ探っていたでしょ』

私『あーあー、あの時の、これは失礼致しま
した。最近頭がアルツでね、物忘れがひどくてご
めんなさい』

実は私、昨年からテンカラを始めたのだが、その振り
込みの練習に禁漁になった10月、硫黄沢に水戸葵の武
藤氏の指導の元、入谷したのだった。勿論魚を釣るつも
りはなかったので（？）、すぐに飽きてしまいキノコ採
りに変更したのだった。彼達は東京北稜会の人達で、我
々が釣りもやっていたことを知っていたが、禁漁だとい
うことも知っていて、その事を口に出さない気遣いには
嬉しかった。しかし、悪い事は出来ないものですね。こ
の先私達が先行する。ルート図によると、一の沢手前か
ら左岸を巻くようだが直登もできそう。15mは真ん
中、続く10mは正面を登って右トラバース。関口氏も
松原氏も快調に登ってくる。天気も良く気分も最高だ。
あとはこれといった悪い所もなく鶏冠尾根に登り着いた。



トサカ尾根の懸垂下降

関口氏もリードしたが、この調子なら西表は心配ないだ
ろう。

鶏冠尾根は以前より踏跡もはっきりして迷う心配は殆
どなくなった。中高年のハイカーともすれ違った。途中
わざと踏跡から離れ古いルートに向かう。このルートは
20m弱の懸垂が必要で楽しい思いができる。現在のル
ートを辿れば懸垂の必要はない。中高年の先行パーティ
はちょっとした岩場でもザイルを使っていた。まあ一般
登山道よりは楽しめる尾根ではある。東沢が一望できる
岩のテラスがあるはずなのに今回はそこを通らない。ど
こでどう道が別れるのか分からなかった。

山菜には遅くキノコには早い。なんの収穫もなく降り
てしまった。なんのお土産もなく帰宅すると、私には厳
しいお仕置きが待っている。一時間以上の正座と晩酌晩
飯抜き。さらにエスカレーターすると縛り、ローソク、ム

チ。なんかアチラの世界に行きたい。あ〜あ帰るのがいやだなあ〜。俺家出たくなったよ、誰か泊めてくれない？

あとは観光客の多いハイキング道を通して駐車場に着いた。

駐車場(6:26)ー鶏冠谷出合(7:01~7:12)ー二俣(8:20)ー鶏冠尾根(11:19~11:41)ー鶏冠谷出合(14:29)ー駐車場(15:18)

(本図 記)

八ヶ岳・赤岳

1999. 6. 27

パーティ L 本図一統、菊地光夫、他3名

私の住む八郷町役場から、今年登山教室を催したいのだが、講師をお願いできないかとの話があった。人数は40名で1泊だそう。私には登山講師なんぞ初めての経験で、自信などというものはなかったが、私以外に講師を2名、アシスタントを3名、計6名のスタッフを付ける条件で受けることにした。そこで何回かの検討会を行い、行き先を赤岳に決定した。

講師は私と八郷町住民で水戸葵山岳会の上村保氏と当会の菊地の3名、アシスタントは役場の職員3名にした。

今回はその下見山行である。26日夜、役場の公用車で出発、美濃戸には真夜中に着いた。生憎雨が強くテントを張るまでに衣服が濡れてしまうほどだった。明けて27日、雨の中を北沢経由赤岳鉱泉に向け出発した。登山経験の少ない役場のS氏は寝不足の中、辛かったと思うが頑張ってくれて、鉱泉までは順調に行った。まずは泊まる予定の赤岳鉱泉の下調べである。部屋などを見せてもらったが、あまり山小屋に泊まった経験のない私は、小屋の素晴らしい出来に驚いた。松風呂まであり、これなら参加者達も快適に過ごせるだろう。(私個人の好みは昔のランプの山小屋なのだが)

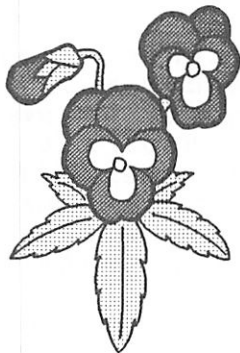
次に行者小屋まで行き、登山ルートの下見である。この悪天のなかS氏に登ってもらうのは気の毒なので私と

上村氏2人で登り、あとの3人には行者小屋で待っていてもらうことにした。一般登山道ではあるが、参加者の殆どは中高年なので私はどうしても見ておきたかった。私は八ヶ岳はそれこそ数え切れない程登っているが、いつも冬ばかりで夏は知らないのだ。行者小屋から地藏尾根を登る。傾斜は強いものの鎖や足場はしっかりしており、冬とはちがう。頂上を回って文三郎道を降りる。私が心配していたのは裏腹に、どちらかというこの下りの方がスリッパしやすく危険を感じた。まあでも心配するほどでもあるまい。一周所要時間は1時間50分であった。これで道の状態が分かり、中高年でも大丈夫であるという自信が得られた。S氏にルート状況を話し、本番のルートはこれに決定した。

行者小屋からは南沢を通して美濃戸まで下り下見山行は終わった。あとは本番での無事故全員登頂を祈るだけだ。

美濃戸(5:45)ー赤岳鉱泉(7:29~7:54)ー行者小屋(8:25)ー稜線(9:08)ー赤岳頂上(9:43)ー行者小屋(10:18)ー美濃戸(11:59)

(本図 記)



はじめちゃんの思い出日記〈最終回〉

22年目の真相【甲斐駒ヶ岳赤石沢奥壁Aフランケ】

1978年に発行されたACC-Jの会報『ナーゲルN°8』に掲載された”甲斐駒ヶ岳赤石沢奥壁Aフランケ”の22年間謎とされた真相を、白日の下に曝け出したいとの思いで筆を取る事にしました。尚、当時のメンバーが存命中なので仮名としますが、賢明な読者には誰なのか推測は容易であると思います。当時のACC-Jはメンバーが粒ぞろいで、パートナーには事欠きませんでした。当初、木村と吉井の2名で甲斐駒ヶ岳Aフランケ～Bフランケ～奥壁左ルンゼの継続登攀を計画しました。どうせ行くなら大武川を遡行し、更に赤石沢を詰めて前記ルートを登攀した方が充実感があるのではないかと思います、会の集会で発表しました。今年の夏合宿は個人山行方式で実施する事が決定されていましたが、特に計画の無かった名沢氏、金井氏の2名が直前になって同行を申し出ました。今年は継続登攀を目標に掲げていたので、2パーティではスピードロスが避けられず躊躇していると彩の国の高級官僚名雪氏（いけない仮名だっけ）の『美味しいものを食べさせてあげるから』の一言に弱い貧乏クライマーの我々は、喜んで一緒に行く事にしました。木村・吉井パーティと名沢・金井パーティは同一行動をとるが、別パーティとして食料計画&装備計画は別々に計画しました。木村・吉井パーティは継続登攀が目的なのでツェルトでのビバーク、食料計画は最低にして軽量化を図りました。この事が後々我々のウイークポイントになろうとはこの時は露知らず……。韭崎の駅からタクシーで林道の最奥まで入り、まだ夜の明けきらない真暗な闇の中を大武川に向かって歩き始めました。雨模様の中、数回の徒渉とナメ滝の直登&高巻きでやっとのおもいで赤石沢の出合に到着。今回我々は赤石沢奥壁の登攀を目的にしていたので、草鞋ではなく登山靴で遡行していたので結果的に高巻きが多くなってしまいました。赤石沢出合に適当なビバーク地を探してツェルトを張り、粗末な食料を口にして横になると直ぐに熟睡状態。名沢・金井パーティは今日一日強度の緊張と疲労が続き、興奮してなかなか寝付かれない様子だったらしい。

翌朝5時30分に起床し手早く朝食の準備に掛かるが、隣のツェルトはまだ寝ているらしい。心配してツェルトを覗き込むと泥の様に眠っている2人を起こすのは忍びないが、心を鬼にして声を掛けて無理矢理起こし、出発の準備を促すが昨日の疲労が残っているのが明らかで心配である。ツェルトを撤収して赤石沢に入るが、赤石沢の出合は小さく水量も少ないので、この奥に大岩壁が聳え立っているとは想像が出来ない程貧相に感じる。更に進むと赤石沢の大滝がその姿を現してくるが、昨日から振り続けている雨の影響で水量が多い。赤石沢の完全遡行と奥壁の連続登攀を目指している木村・吉井パーティは大滝の直登を主張するが、赤石沢大滝に圧倒されている名沢・金井パーティの事を考慮して右壁の巻道を登ることとした。ブッシュが密生した大滝の側壁を腕力を頼りに強引に登り、大滝のだいぶ上に出ることが出来た。右から入っている八丈沢を横切り、草付きをトラバースして赤石沢に降り立ち更に進むと30m位の急なナメ滝。これを登ると雨の中に赤石沢奥壁Aフランケの大岩壁がその姿を現わしてきた。Aフランケ下のスラブ帯まで登ると上部に人の声が聞こえる。大阪泉州山岳会が新ルート開拓中との事。Aフランケ下部のスラブを右にトラバースして黒戸尾根から続く尾根の側面に岩小屋を見つけて潜り込んだ。明日の天候の回復を望み、早々とツェルトの中で横になった。翌朝も雨は降り続いていたが、人工登攀中心のAフランケは雨中でも登れるので登攀を主張したが、精神的な疲労が激しい名沢・金井パーティは停滞を主張。名沢・金井パーティの豊富な食料に目が眩んだ我々は結局、買収される事になりその日は停滞する事にした。岩小屋の中で名沢・金井パーティの豊富な食料を食して他愛もない話で1日過ごしたので、名沢・金井パーティの精神的疲労も今日1日の停滞で回復する事だろう。

翌朝、小雨が残るが今日はなんとか登れそうである。我々が先行し、名沢・金井パーティには後続して貰う事でAフランケ白稜会ルートに取り付いた。恐竜カンテのフェースを人工登攀で直上し、3ピッチ目でカンテを左に回り込み上部の大ジェードルを目指して人工登攀で直上して赤蜘蛛ルートに入った。ヨーロッパの岩壁を思わせる花崗岩の大ジェードルの登攀は気分爽快である。下を見ると1ピッチ下に名沢・金井パーティが登ってくるが、人工登攀が得意ではないらしく遅れ気味である。ルートは恐竜カンテを右に回り込み垂直のフェースをボルトに導かれ直上するが、打ち込んであるボルトが若干下向きの為多少不安になる。下では名沢・金井パーティがカラビナ&シュリングの残置を要求しており、一宿一飯の恩義があるので仕方なく残置する事にした、更に草付きを直上して登攀終了。待つ事1時間弱で名沢・金井パーティが登ってきた。この様子では翌日のBフランケの登攀は無理と思ったが、思慮深い我々は口には出さず黙って手を差し出しガッチリ握手。その日は黒戸尾根8合目付近の岩小屋でビバーク。翌朝は朝から雨。名沢・金井パーティは昨日の大登攀で心身共に疲労しBフランケの登攀を中止したいと申し出る。愛と友情に厚い我々2人は協議の結果、名沢・金井パーティを捨てるに忍びないのでBフランケの登攀を諦めて行動を共にする事にし、長い黒戸尾根を下山して今回の山行を無事に終わる事が出来た。以上が愛と友情に満ち溢れた”甲斐駒ヶ岳赤石沢奥壁Aフランケ”の真相である。当時のメンバーで懲りずに現在も一緒に登っているのは、名沢・木村の2名になってしまったのは寂しい限りである。

現在は沢登り&山スキー中心の山行であるが、昔からの仲間と一緒に登るのは楽しい。

1977年8月(木村・吉井・名雪・金沢)

《友好山岳団体の月報、会報、その他》

ありがとうございました

月報

◎Rohman NO.168, 1999, 4, B5 43P 浦和浪漫山岳会

池田知沙子さんの追悼号, 会員、会友、会員外の方々よりの追悼文, 池田さんの山行一覧ほか

◎Rohman NO.169, 1999, 4, 5 B5 48P 浦和浪漫山岳会

写真の写し方は参考になる。越後・高棚の頭割岩沢左稜、奥利根・刃物ヶ崎山東壁3尾根、浅草岳。二つ岩沢右稜、仙ノ倉山北尾根、谷川岳マチガ沢雪上、越後・中ノ岳蛇子沢尾根～大ビラス沢左岸尾根下降～北ノ又川横断～中ノ岳東尾根～中ノ岳～十字峽ほか

◎Rohman NO.170, 1999, 6 B5 84P 浦和浪漫山岳会

O B山菜山行、南会津・博士山、枯木山、志賀高原八間山、岩トレ妙義ロックガーデン、春山合宿・奥利根大水上山集中(4パーティに分けて北ノ又川左岸流域を廻行した)ほか

◎わらじ NO.517 1999, 4 B5 20P わらじの仲間

冬の集中・武能岳西尾根、土樽～蓬峠、松又谷二の沢右稜、武能岳東面S B 1稜、第1尾根、第2尾根ほか

◎わらじ NO.518 1999, 5 B5 16P わらじの仲間

会越・鬼ヶ面山マンモス尾根、上州・王城山、爺ヶ岳主稜、小松原越えほか

◎わらじ NO.519 1999, 6 B5 21P わらじの仲間

GWの山・黒部別山中尾根～ハツ峰峰～Dフェース富山大ルート～本峰～真砂尾根、朝日・針生平～西朝日岳～以東岳～大朝日岳～祝瓶山～針生平、上越・下津川山～巻機山、北ア・白馬岳～親不知、鳥海山、台湾・馬達拉溪ほか

◎逍遙 NO.95 1999, 4 B5 17P 逍遙溪稜会

南会津・舟鼻山、たかつえスキー場～台鞍山スキー場、湯河原・幕岩、南会津・大杉岳、丹沢・中川川マスギ嵐沢ほか

◎逍遙 NO.96 1999, 5 B5 12P 逍遙溪稜会

丹沢・水無川源次郎沢、尾瀬・富士見峠～山ノ鼻、丹沢・谷太郎川鳥屋待沢左俣、奥多摩・峰谷川長久保沢、ほか

◎逍遙 NO.97 1999, 6 B5 20P 逍遙溪稜会

南紀・大塔川黒蔵谷本谷、黒蔵谷高山谷、奥秩父・笛吹川西沢行者谷、奥多摩・南秋川小坂志川湯場ノ沢～中ノ万六沢、谷川・大源太周辺ほか

◎Next! No.40 1999, 4 B5 16P 山岳溪流釣り集団むげん

奥秩父・ブドウ沢、近況報告、くろすぽいんと、ほか

◎Next! No.41 1999, 5 B5 28P 山岳溪流釣り集団むげん

みちのり、山菜特集ほか

◎Next! No.42 1999, 6 B5 48P 山岳溪流釣り集団むげん

奥秩父・滝川～大洞川、奥多摩・小川谷犬麦谷、奥秩父・滝川本谷、豆焼沢～水晶山～古礼沢、滝川本流～水晶谷～ブドウ沢、井戸沢～八百谷楨沢、熊穴沢、曲沢～金山沢ほか

◎とまのかぜ No.78 1999, 5 B5 23P 童人とまの風

八ヶ岳・編笠山～赤岳、越後駒が岳、茂倉谷スキー、白馬岳主稜、頸城・容雅山、北海道・迷沢山、塩谷丸山、南会津・家向山ほか

◎とまのかぜ No.79 1999, 6 B5 25P 童人とまの風

鳥海山、立山～薬師岳～双六岳～新穂高温泉、十字峽～平ヶ岳～尾瀬ヶ原、鳩待峠～平ヶ岳、頸城・焼山北面台地空沢山、栗子・摺上川鳥谷、奥多摩・日原川小川谷、奥秩父・狼谷～荒沢谷ほか

◎山紫水明 No. 1999, 4 B5 8P 山旅の会

仙ノ倉山北尾根ほか

◎山紫水明 No. 1999, 5, 6 B5 4P 山旅の会

RCT鹿沼ほか

◎すずらん通信 NO.217 1999.4 B5 14P 鈴蘭山の会

宝川温泉～布引山、吾妻山周辺スキー、妙高三田原山、守門岳、帝釈山～大中子山、野伏ヶ岳、白山・大笠山ほか

◎すずらん通信 NO.218 1999.5 B5 12P 鈴蘭山の会

頸城・小谷温泉～松尾川～天狗原山、笹ヶ岳～金山、尾瀬スキー、火打山、月山ほか

◎すずらん通信 NO.219 1999.6 B5 13P 鈴蘭山の会

大洞川救助訓練、飯豊スキー、鑓温泉、鬼怒沼湿原～黒岩山～帝釈山ほか

◎溪游 NO.105 1999.5 B5 12P 溪游会

台高・三の公川明神谷、播州・峰山小田原川本谷、比良・安曇川口ノ深谷、奥美濃・釈迦嶺、播州・笠形安根宇川滝ノ谷、段ヶ峰倉谷ほか

◎溪游 NO.106 1999.6 B5 10P 溪游会

南紀・小口川滝本ガマ谷、本谷、北谷、大峰・北山川小谷川、川迫川白子谷、白川又川塩ノ谷、台高山脈縦走、白山・釈迦岳ほか

会報

◎遡行 NO.18 1999.4 B5 163P 大阪わらじの会

クラブからの寄贈ではなく、池上さんから送られてきたもの。川内、越後三山、上信越、頸城、北ア、中ア、南アに各1本、白山5本、福井、鈴鹿、比良、京都北山に各1本、台高12本、日本三大ゴルジュ3本、大峰冬季単独奥駆け行、失われた窟を求めて11本、大峰4本、奥高野3本、南紀4本、四国2本、尾鈴1本、屋久島3本ほか

以上閲覧したい方は本図まで



編集後記

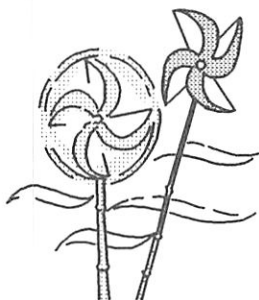
久しぶりに、アブミ（人工登攀）に乗った。A2以上のハングを越える練習をする為に新人をともなってゲレンデでフリーの練習した後、その場所まで車で行ってトレーニングを行なった。

昔とったきねずかとはばかりにトップで行くが、フィフィが合って無くてえらくてこずってザイルをトップロープか出来るよう工作しローダウン。そして今日始めてアブミに乗るという新人、Y氏&W積にアブミの乗り方などをレクチャー後、早速体験してもらう。が、しかしここで某F氏が保有している究極の秘密兵器レスティングフィフィなる物の登場をみる。某F氏がY氏アンドW積にアイテムの使用方法を講義後、早速、Y氏に登ってもらうが、あつという間に垂壁を越えハングを渡り終了点まで行ってしまった。続くW積なんか“ちょっと待ってくれ”と言いたくなるような速さである。私の立場が？、立場が…。

『俺は、今まで何をやってきたんだ！』と、しばし呆然。私が今までコツコツと積み上げてきた物がガラヘングワランと崩れ去ってしまった。そう、いつ迄も過去の栄光に浸ってはい時代に取り残されてしまう。常に時代は変わっているのである。テクニックも必要だが、その道具を知り、見聞を広め、有効利用しなければ時代後れのクライマーになってしまう。私もいつも革新的な考えをもって山に、山道具に興味を持って時代遅れの落ちこぼれクライマーにならないように努力しようかな。まだまだ、若いもんには負けられないモンネ（ちなみに早速、山道具屋でレスティングフィフィを購入してしまったN編集長であった）。

*某M氏曰く17年前からそのフィフィはあったと話していた。

（編集長）



季報[R&V]第33号 発行1999年 春 発行者：本図一統
発行所：ACC-J茨城 〒306-0501 茨城県猿島郡猿島町逆井318
生井一男方

編集者：生井一男
印刷所：やさと印刷



岩壁、沢、冬山のクライミング集団